



半泊教会献堂100周年記念 2022. 10. 30

「島のひかり」ホームページアドレス

<https://shimanohikari.jimdofree.com/>

発行

カトリック浦頭教会
広報委員会
五島市平蔵町2716
TEL 0959-00072
印刷・(株)才津印刷所

「ひとしづく」

主任司祭 工藤 秀晃

主の御降誕と新しい年の始まりを心よりお慶び申し上げます。行動制限のない年末・年始となり、帰省された方、久しく会うことのできなかつた大切な人をお訪ねされた方もおいでのことでしょう。

さて、南米アンデス地方に古くから伝わる『ハチドリの一としづく』というお話があります。

【あるところに多くの生き物が暮らす豊かな山があった。ある日、そこへ雷が落ち山火事になった。火は瞬く間に燃え広がり、里に逃げ延びた動物たちは途方に暮れて燃える山を見つめた。「もう何もかも燃えてしまった。終わりだ：」「住む場所が燃えてしまって、これからどうしよう：」動物たちは口々に言う、落胆してしまった。しかし、一匹だけ必死に消火活動をしている動物がいた。ハチド

リだった。動物たちは彼女を笑い、指を差して馬鹿にした。

「今更そんなことをして何になる、意味のないことを」「お前のくちばしで運べる水の量じゃ、火の粉すら消せない」。するとハチドリは静かに、しかし力強くこう言った。「私は、私の出来ることをしているだけ」。

結局、山はほぼ全焼してしまった。しかし、ハチドリが必死に消火活動をしたところだけは何とか燃え残り、そこには一輪の花が咲いていた。他の動物たちは、自分たちの愚かさに気付き、恥じた。誰もハチドリを馬鹿にする権利などなかったのだ。いや、むしろできることすら放棄していた自分たちの方がよっぽど笑われるべき存在だったのかもしれない。

その後、逃げ残った動物たちは皆で協力して山に木を植えた。最初一輪の花しかなかった山は次第に緑が増え、やがて最初より立派な美しい山となったのだ。】

いつも、新たな始まりは誰かの小さな一歩からです。その一歩は、必ずと言えるくらい笑われていきます。馬鹿にされ、反対されています。まるで、そういう道を辿るようになっていくかのように。でも、ハチドリは教えてくれます。「他の人を非難し、怒りや惜しみや妬みに身を任せる暇があったら自分の出来ること、自分にも出来ることを淡々とやっていこうよ。」「あきらめや無力感に心を支配されてしまうことがあるけれど、どんな困難な中においても私たち一人ひとりには『出来ること』が必ずあるんだよ。」と。

私たち一人ひとは、あたたかも小さなハチドリの力に過ぎないのかもしれない。でも、無力感やあきらめを吹き払い、しっかりと問題と向き合い、「私に出来ること」を考え、行動し、それらを積み重ねてゆくことができるとしたら、燃えている森の「火」を消す力にだってなれるかもしれない。

新年の挨拶

評議会副議長 鍋内 秀明

主の御生誕、新年明けましておめでとうございます。

新型コロナウイルスが猛威を振るい始め三年が経とうとしています。教会に集まることも許されない時期があり、日常においても感染の脅威と向き合いつながら不安な日常生活を過ごされたことと思います。まだまだ終息が見えない状況の中で、今後、あらゆる感染対策を講じながら、生活をしていくしかないのかもしれない。

昨年を振り返りますと、中村倫明大司教様が着座され、浦頭小教区においても大きな出来事がありました。一つは、十月三十日に行われた半泊教会一〇〇周年記念事業です。半泊教会出身者も交え、十数名で実行委員会を立ち上げ、幾度となく協議を重ね、どうにか記念式典の日を迎えることができました。恥ずかしながら、半泊教会でのミ

サにこのとき初めて参加しました。多くの出身者が集まり、とても感動的なミサで、信仰を守り抜く強い意志と、優しさを感ぜました。今後、この教会をどうやって守っていくか、関係者だけでなく、小教区全体、一人一人が自分のこととして考え、今できることに取り組んでいく必要があると思います。

二つ目は、新しいミサ式次第への変更です。時代の変化に伴う典礼の刷新が繰り返しの必要であるとの考えから、これまで長年親しんできたミサ中の言葉が四十四年ぶりに大幅に変更され、戸惑うこともしばしばです。ついでに「また、司祭とともに」と言ってしまうのは、私だけでしょうか。早く本を開くことなく、ミサに参加できるようにしたいと思います。

今年もまた色々なことが待ち受けていると思いますが、最初

の初々しい気持ち忘れず、周りの方々に助けられ、少しでも助けられるようになりたいものです。皆様が神様のお恵みを受け、健康でますますご活躍できることを祈念いたします。

新しい

「ミサの式次第」

が始動…

昨年の待降節第1主日の十一月二十七日より、「ミサの式次第」の小冊子を用いながらのミサは、神父様のページへの指示と「聖書と典礼」を目で追いつながら右往左往、でも慣れるしかない!!

ミサは私たちにとって最も大事で、神様と一つになる手段です。神を賛美する心でスムーズに移行できますように……。



祝 半泊教会百周年

「感謝」

去る十月三〇日、半泊教会の献堂百周年が行われました。記念ミサでは、半泊出身の司祭ということで司式をさせていただきました。深く感謝しています。有難うございました。今回の記念事業を企画して下さった工藤神父様を始め、浦頭小教区の役員の方々・信徒の皆様に対し、心からお礼申し上げます。また、当日の記念ミサには、下五島地区の地区長中村神父様他、全員の神父様方がご参列下さり、感謝の気持ちでいっぱいです。

今では人の姿が消えてしまった半泊ですが、この中心部にある教会は、忘れることができないう宝物です。私だけでなく、半泊を古里としている方々にとってもそうだろうと思っています。昔は月一回の巡回ミサがあり、明るくなったら仕事に出かけら

れるようにと、早朝四時から行われていました。それでも、間伏やキビナコ網代からもほとんどの方が参列していましたので、教会はほぼ満員になっていました。



「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」が世界遺産に認定された関係で、多くの巡礼者が半泊にもやって来ているようです。かつて、熱い祈りが捧げられていた信仰の証として、存在し続ける価値があるのではないかと考えています。自然豊かな場所で、人の目で見ること

のでできない神様のお姿を「見ることのできる家」として、守っていくことが出来たら…と願っています。

この教会の建設に当っては、はるか遠くのアイルランドの信徒たちの浄財が費用の一部になっています。そのため保護聖人は、「アイルランドの使徒」と呼ばれる聖パトリックです。アイルランドの信徒の皆さんの想いも、後世に伝えていくことができれば、善き模範として語り継がれていくものと考えています。

崎濱 宏美



百周年プレートの祝別の様子

記念ミサ内では、長きにわたり教会奉仕に御尽力頂きました宮川ツタエさんに、工藤神父様より感謝状を贈呈しました。

宮川さんより挨拶

天国で見守ってくれている先祖の皆さん、喜んで下さい。貧困の中、貴方達が残してくれた信仰の財産、半泊教会が今日ここに地元出身である崎濱神父様を始め、浦頭教会主任神父様、並びに下五島地区の神父様方、又地元出身の人達に集まって頂き、盛大に100周年を迎えました事をご報告致します。

半泊教会信徒を代表して一言ご挨拶申し上げます。

私は100周年にあたって、主任神父様に自分の胸の内を話しました。

「神父様、来年は半泊教会100



感謝状の言葉を聞きながら…。

周年を迎えます。でも、私一人では何も出来ません。司教様には声かけしなくてもいいですから、せめて崎濱神父様に来て頂いて、地元出身者に声かけして集まって頂き、ミサだけでも「良かった。」と話しました。そうすれば、先祖の人達に対しても顔向けが出来ると思ったからです。

神父様は私の話を持ち帰って下さり、100周年に向けて役員さん達と何度も話し合いをされ、何度も何度も足を運ばれ、

私の知らない間に100周年に向けて着々と準備を進められていました。

ある時、従妹から「教会の方で100周年に向けて準備してくれてる様だから、あんまり心配しなくてもいいよ。」と聞かされ、初めてその時、教会側が動いてくれている事を知り、安堵しました。私の心の中では、この様に盛大に100周年を迎えると思っていなかっただけに、感無量です。下五島地区の神父様方々が出席して下さる事を知ったのも一ヶ月前です。先祖の人達も天国で喜んでいる事でしょう。この様に盛大に半泊教会でミサがあるのも、今日が最初で最後でしょう。この歴史ある半泊教会が私の代で終わる事なく、これから先も何時までも何時までも、守り続けて行かれる事を願うばかりです。

最後になりましたが、今日のために色々ご協力して下さいました役員の皆様、地域の皆様、今日のためにわざわざ足を運んで



宮川さんの挨拶が堂内に流れて。

下さった神父様方々、地元出身の皆様、又、今日のためにワックスがけを協力して下さいました五島つばき蒸留所の皆様に心から感謝致します。

又、今日は特別に感謝状まで頂き、びっくりしています。特別な事をした訳でもないのに恐縮しております。

今日は、本当にありがとうございます。

半泊信徒代表

宮川 ツタエ

半泊教会百周年に寄せて「随筆」

身をもって感じた 百年の長さ

山崎 早苗

今年の夏休み、子供と一緒に「百年の家 この百年間に起こった出来事」という自由研究を行いました。その題名の通り、この百年間に起こった出来事を「国・地域・この家」と三つの項目に分けて、それぞれ手分けして調べて年表にまとめたのです。A4の紙を縦にしたものが十年分、それを十枚つなげた年表です。一枚が二十一cmほどなので、十枚つなげた年表は二m以上にもなり、こんな小さな紙にまとめてもこんなに長い!!と、その長さに圧倒されました。わが家と半泊教会が同じ年だったことは嬉しい偶然でした。この百年間、見てきた風景はそれぞれでも、底流には共通のものを感じます。百歳、本当におめでとうございます。共に祝って光栄です。

「ローマへ」 長八神父様列福の 意見書提出!

ブラジルではこの程、中村神父様の福者になる為の列福申請手続きに必要な司祭団の意見がまとめられ、小冊子としてローマ教皇庁に送付される事になりました。

その為、とり急ぎ生誕の地における中村神父様の列福に関する活動状況を文章化し、東京在住の青木神父様の元に送って欲しいとの連絡が広報委員会に入りました。委員会では工藤神父様、赤尾議長が文章確認の上、青木神父様の元へ送付。青木神父様がポルトガル語に翻訳した後、ブラジルの司祭団の元へ送られました。

以下、その文章を掲載いたします。



浦頭小教区における 中村長八神父様の列福 に関する動きについて

カトリック浦頭教会
広報委員会

ブラジル移民の父と呼ばれ、日本全土に及ぶ様な広大な土地を馬と自分の足だけで布教していった中村神父。今もブラジルの地で多くの信徒の尊敬の的になっていて彼は、故里の地においても特別な存在として強く意識されています。

バチカンにおいて彼が福者として認められ、さらに長崎そして日本の信徒にとって一筋の大きな光となっていく事を希望します。そして、彼の隣人愛と神様の教えを説いた生き方、生涯が、世界の人々に必ずや大きな共感を持って受け入れられる事を信じてやみません。

浦頭小教区が創立して五〇年以上、また、ここ五島に初めての信徒が誕生して四五〇年以上になります。そのような歴史の

中、特に中村神父の生き方は、多くの信徒の目指すべき指針として小教区の活動に反映されています。

一九七七年には、ローマ教皇から賜った勲章が長崎大司教区より堂崎資料館へと移管され、中村長八神父の故国を巡るブラジル巡礼団がいくつも浦頭小教区を訪問し、その内の一つ青木勲神父の引率によるグループがポルトガル語によるミサを浦頭小教区信徒と共に行ないました。

二〇一〇年には、浦頭小教区の信徒が、中村神父がブラジルに行く前に赴任されていた奄美大島に巡礼の旅を行ない、彼の信仰の足跡に触れました。

同年、中村神父列福の為の祈りを作成し、折りに触れて祈っています。現在、年に一度彼の命日にあわせてミサを行なっています。また、異国に旅立つ前に故里の人達と共に記念として植えられたマキ木とその附近は、尊敬の思いから信徒によって草払い等が行なわれ綺麗に整え保

たれています。また、信徒の彼に対する意識の高さをうらづけるとかのようには小教区の広報誌(島のひかり)に度々中村神父に関する記事が掲載されています。最近、ブラジルの大学生が彼の生涯をドキュメンタリー風に作り、世界にポルトガル語で配信したおり、それを日本語訳にして欲しいという要望を長崎大司教区に陳情しましたが、その事にも繋がっていると感じています。その他、小・中学生にこの地の歴史を教えるプログラムにも中村神父の生誕の地が入ることが多くあります。

彼の生涯がしっかりとらえられた時、福者になる道が見晴らされ、それは子供達、未来を担う人達の道標になると信じています。



奥浦慈恵院の歴史③

奥浦慈恵院院長 Sr入口 里子

この養育救済はマルマン師と賄いと教え方を務めるツイ一人^{まかな}で出来ることではありませんでした。しかし、最初から良き協力者に恵まれ、大泊の梅木キワ・キサ・イサの三姉妹、浜口スエ・マスの姉妹など、熱心なキリスト信者の子孫で教会奉仕を手伝っていた娘達の援助を受けることができました。近所の人々から収容された子どもの家は「小部屋」と呼ばれるようになりました。

小部屋で奉仕する乙女達は、マルマン師から「ひとつの靈魂を救うことは全世界の全てのもを手に入れるよりも価値があることだ」と教えられ、小部屋に集まった子ども達を神から授けられた実子として大切に養育しました。養育活動が二十四時間切れ目なく、行われなければならぬ必要から、また小部屋

に収容された子どもが増加したことから、自宅から通って奉仕していた乙女達は、小部屋で子ども達と共に生活する事になりました。後に、この共同体は「幼きイエズス会」と名づけられていきます。それは「不幸な子どもの中に宿る幼いイエズスを養い育てる」という目的に由来しています。小部屋は地域の人々と同じ水準の生活様式を営み、家庭的雰囲気の中で大家族集団となっていました。

養育活動を始めて二年三ヵ月後、収容児が次第に増え、大泊の小部屋が狭くなったので、大泊から堂崎教会の敷地内に移りました。六十六坪の敷地に建物^が新築され、教会と並んで建てられました。海辺の方に玄関があり南向きでした。この頃から「小部屋」ではなく「養育院」と呼ばれるようになりました。明治二十八年、養育院の創立者マルマン師は、長崎伊王島へ転任し、後任として同じパリ外国宣教会のペルー師が就任しま

した。ペルー師は、一八四八年フランスに生まれました。ペルー師が十歳の頃、同じフランス国内のルルドで聖母の御出現が^あっており、日本の信徒発見のニュースが世界の教会を驚かせたのは十七歳の時でした。この二つの神秘的な出来事は、彼の人生に大きな影響を及ぼしています。二十二歳で司祭に叙階されたペルー師は、翌年パリ外国宣教会に入会し、二年後に日本に派遣されました。一八八七年マルマン師の後任として堂崎に着任したのが三十九歳の時です。

初代院長となっていた濱崎ツイが辞任し、浦上より浦岡サクが二代目院長として派遣されて来ました。禁教令廃止後、直ちに岩永マキ（浦上養育院創立者）らの仕事に加わり、ド・ロ師の指導を受けた人でした。第三代院長となったのは溝口ベンであり、同じ浦上からの会員で三十七年間、奥浦の養育事業の充実と共同体（修道生活）の確立にあたっています。



修道院移設の様子

ペルー師は、母親の残した遺産を投じて奥浦の山林を買い求め、修道院と養育院を移転させました。堂崎天主堂の建築計画のためです。山林の開墾作業は会員とその家族も加わって行われ、ペルー師は、毎日堂崎の司祭館から通って一緒に汗を流し、工事の指導、現場監督を務めました。一九〇四年に養育院新築完成、一九〇八年には堂崎天主堂が完成しました。

ふるさとの信仰

中村長八師に学ぶ(3)

六十歳を前にして、はるか遠いブラジルに渡った中村神父様はどのような思いで十数年の司牧に励まれたのでしょうか。苦労、困難は想像を絶するものだと思いますが便りから読み取れる根性、熱意はまるで若い宣教師のようです。写真では、がっしりした身体を備え、眼光のすどい目をもった神父様です。きつと疲れや痛みにも前向きに立ち向かい、山を歩き、長い道のりをロザリオを片手に歩き続けたことでしょう。

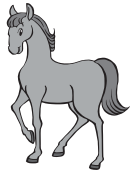
三十五年ほど前に出会ったブラジル移民二世のシスターは隣村、隣の家といってもかなり遠く、子どものお使い程度のものではないと語っていました。

中村師の便りには、旅に馬を使うことがあるが慣れていないので何度も落馬したと書いています。険しい山道、山中を越え

て辿り着いた所で日本人信仰の笑顔に出会った時の喜びを想像します。母国語で久しぶりのミサに与り、高らかに祈り、聖歌を歌う中村師は、遠い異国で暮らす信徒の真の霊父でした。

昭和四年五月一日の教報で編集者は次のように書いています。「ブラジルの中村師は相変わらず南船北馬、席暖まるにいとまないという位に奔走しておられる。」つまり、この生き方はイエス・キリストの模範を映しておられたということです。イエスは「わたしには枕するところもない」と言われ、各地の宣教に巡回されました。

深い山の中で食物もあまり持たず、羽織る物にも乏しく、疲労で腫れた足をかかえて次の村へ行ったことも度々あったようです。とにかく熱意そのもの！後輩である私たちががんばりましょう。



教会 クリスマス イルミネーション

十一月二十七日、教会はクリスマススの準備に大忙しです。

そんな時、数年前からおくうら夢のまちづくりが協力して坂道のアーチを主体に頑張って頂いています。今回は色々ミスが生じ、午前中で終える予定が午後一時半までずれ込みました。

教会より別に、堂崎教会、平蔵の消防詰所にもイルミが輝いています。皆でクリスマスを祝おう。次回もよろしくお願い致します。

一月八日は後片付けがありました。御苦労様でした。



秘 跡

◎主よ、永遠の安息を

エリザベット 大浦 ショ

九十六歳 浦 頭

十一月四日 永眠

ドミニコ 梅木 哲巳

六十七歳 大 泊

十二月九日 永眠

(長与教会所属)

マリア 宮崎 ヤエ

九十九歳 宮 原

十二月二十五日 永眠

アグネス 鍋内 輝子

九十二歳 南河原

一月二日 永眠

テレジア 赤尾 ツヨ

九十七歳 浦 頭

一月六日 永眠

○ありがとう 感謝

千葉市 入口 春男様

浦 頭 五島式典社様

神戸市 出口 久光様

はたちのお祝い

元日ミサ内にて、帰省された二十歳の二名の方に、工藤神父様よりプレゼントと青年会の川口瑞希さんより、お祝いの挨拶をして頂きました。二名より、それぞれの近況報告をお聞きました。

二名に幸あれ。



左より入口駿一郎さん、鍋内優海さん

ふるさとだより

半泊教会の横に

移住の三名が
(代表 門田クニヒコ)

「つばき蒸溜所」
開業!!

十二月二十日に五島(半泊)の自然と水に惚れ込み、五島産ツバキの実などをブレンドしたクラフトジンの販売を始めた。室内は教会のイメージで見学コースもあり、ドイツ製の専用蒸溜器は美しく、月二千本製造できる。ネット販売では世界中の人に五島の風景も発信。今時ですねエ。

皆に愛され「ジン」が日常の味となりますように……。



奥浦さるく

―新コースにチャレンジ―

十一月六日、奥小・奥中の子供達を含め、四十名程で浦頭公民館附近から、山登りの様な急坂を経て南河原展望台、草津、再び浦頭・鍋内地区へのかなりタフな道へ挑戦。途中、ブラジル移民の父と呼ばれた中村長八神父の自宅近跡と展望台から見える島々、海中公園の説明をまち協スタッフから聞いて、ちょうど昼飯時に無地到着。子供達の元気の良さに比べ、大人の体力の無さが目立ったサルクだった。



編集後記

日本国中、コロナになやまされた一年でした。今年は少しは良い年でありませうように。

竹山 要司

平穏な日常からかけ離れた日々が続いています。一日も早く「普通の日々」が戻る事を心から祈り過ぎて行きたいですね。

木口 誠也

早くマスクのない生活になってほしいです。聖歌もうたいたい……

江口 初子

年末、東京へ山梨へ旅行した。河川潮上から見た裾野から立ち上がる富士山の圧倒的な存在感に見惚れ、目にやきついた思いが残った。まだまだ感性は錆びついていない様だ。今年もいい意味で心を動かして行きたい。

木口 重憲

宜しくお願いします。

Sr 木口 直恵

小田 洋市

竹山 巧

入口 信